赤十字NEWS

June 2016 Vol.913 6
http://www.jrc.or.jp

日本赤十字社
人間を救うのは、人間だ。 Our world. Your move.

赤十字新聞　編集・発行／日本赤十字社 広報室　〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3　TEL:03-3438-1311　一部20円　赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。

熊本地震災害 明日を見つめて

熊本県を中心に全・半壊家屋が1万6900戸を超えるなど深刻な住宅被害が特徴の熊本地震災害。発災から1カ月半余りがたった今も、避難所生活を送る被災者は9800人を超えており、体調管理や感染症予防が課題になっています。日本赤十字社は避難所への救護班派遣などを現在も継続実施していますが、今後もこころのケアチーム派遣や避難所の生活環境改善、被災者の健康管理などに取り組んでいく予定です。

熊本県阿蘇郡西原村のにしはら保育園にて

CONTENTS

SPECIAL 2 3
熊本地震災害から1カ月半
1日も早く笑顔が戻ることを祈って

SPECIAL 4 5
世界の人道支援に日赤の姿
いのちと健康、人間の尊厳を守る最前線に

AREA NEWS 6 7
香川・山口・福岡・三重
赤十字運動月間報告
ライトアップ運動
常任理事会開催報告
健康豆知識　白内障
Voice&プレゼント

WORLD 8
ネパール地震災害復興支援
被災地に戻ってきた笑顔
先人たちの語る赤十字
橋本祐子（さちこ）

今月の出会い

赤十字語学奉仕団 初代事務局長
若井 亜紀子さん

一歩踏み出すと、世界が一つ広がるんです

1964年の東京パラリンピック。各国選手の通訳や介助をボランティアとして担った赤十字語学奉仕団（当時は通訳奉仕団）一期生の事務局長を務めました。「学生ら若者が活動の中心で、私もまだ22歳。本番に向けた勉強会では、通りがかりの外国人に講師を頼んだり。人間って頼りにされると嬉しいんですね。謝礼はゼロで協力してくれました」と笑顔で当時を振り返ります。

その頃の日本は、ノーマライゼーション（障害を持つ人も平等に）の考え方がない時代。「海外のパラリンピック選手は美容室に行ったり、どんどん外に出るので、本当にビックリしました。また、車いすを押す経験を通じて、道路の小さな段差が障がい者の通行を阻んでいることなど、多くを学びました」

語学奉仕団は現在、2020年の東京パラリンピックに向けて、団員のスキルアップにも取り組んでいます。「熊本地震での大勢の若者のボランティア参加を頼もしく感じました。一歩踏み出すと、世界が一つ広がるんです。次回の東京パラリンピックでもたくさんの若い方が一歩を踏み出し、語学奉仕団などの活動に参加してほしい」と熱い期待を語ってくれました。

PROFILE

1942年生まれ。中学高校時代にJRC活動に参加。16歳の時には、カナダ赤十字社主催のトロント大学で開かれたジュネーブ条約の学習会に出席。その後、日赤青少年課長を務めていた橋本祐子氏（故人）の誘いで語学奉仕団に加わり、日赤職員としても従事しました。

SPECIAL1 熊本地震から１カ月半

1日も早く笑顔が戻ることを祈って

熊本地震から１カ月半。日本赤十字社はdERU（仮設診療所）４班、救護班168班を全国から派遣し、被災地の医療支援活動を行ってきました。地域によっては、その役割を地元医療機関に引き継ぎましたが、現在も巡回診療やこころのケア活動を継続しています。今後も避難所の環境改善や健康管理などに取り組みながら、長期的に支援を続けます。

派遣した救護班 **168班**

派遣したこころのケア要員 **83人**

配布した安眠セット **6,401セット**

設置したdERU（仮設診療所） **4班**

熊本赤十字病院に派遣した医療支援要員 **255人**

配布した緊急セット **654セット**

派遣した医療コーディネートチーム **20チーム**

配布した毛布 **20,980枚**

配布したブルーシート **11,230枚**

（5月23日現在）

こころのケアでストレス軽減

現在、看護師や臨床心理士からなる「こころのケア」班が、被災者や被災自治体の職員などのストレスを軽減するため、傾聴やリラクゼーションを行っています。益城町にリフレッシュルーム、西原村には健康・よろず相談室を開設しているほか、地域の巡回を行い傾聴や健康面・衛生面での注意喚起を行っています。

震災後、住民支援に無我夢中で取り組んできた町職員ですが、実は7～8割の職員が何らかの被害を受けています。精神的な無理が続けば、健康面の問題も発生します。日赤さんから提案いただき、５月初旬に役場内にリフレッシュルームを開設しましたが、ありがたかったですね。「看護師さんたちに話を聞いてもらうことで、気分転換やリラックスが図れた」と利用職員からは好評を博しています。今後の住民支援や復興を進める上でも、町職員が体調を崩すわけにはいきません。リフレッシュルームがその予防に役立っている面もあると思っています。

「リフレッシュルームで気分転換」

震災直後から、益城町役場の職員として住民支援に従事

塘田 仁（とも だ ひとし）さん

日赤を支える縁の下の力持ち

沖縄赤十字病院の救護班の先生を始めとして、近畿地方の救護班、九州圏内の救護班の皆さんに続けて宿泊いただきました。南阿蘇の被災者のために早朝から夜遅くまで活動いただき本当に感謝しています。救護班の皆さんは保存食を持参して来られているんですが、カップ麺やパンばかりでは私たちとして申し訳ないと。少しでも救護活動の助けになればと、夕食の無料サービスをさせていただきました。そして、そのことをブログで紹介したら、各地から山のような支援物資が届いたんです。日本人ってすごい、日本人で良かったと心から思いました。

「日本人で良かったです」

南阿蘇村で活動した救護班が宿泊した「ペンション ハーモニー」のオーナー夫妻

小山弘さん 友子さん

赤十字ボランティア

赤十字防災ボランティアや青年赤十字奉仕団などの活躍抜きに今回の救護活動は成し得ません。救護班のナビゲーションに記録補佐、救援物資の積込み・搬送から洗車まで、「何でも手伝わせてください！」との心強い声に日赤の活動が支えられています。

国内外の報道機関から取材が続きました。困難に立ち向かう被災者の皆さんと共に、全力で救護活動に取り組む日赤職員の姿がメディアを通じて伝えられました。

４月16日未明の本震の時は熊本赤十字病院で取材中。トリアージ準備など素早い対応を目の当たりにして、災害医療の日赤を再認識しました。地域医療機関の復旧状態を見ながら１カ月以上にわたり活動を継続された点も、被災者にとって心強かったのではないでしょうか。一方、今回の地震では日赤以外の医療支援も多く入りましたが、ある局面では医者余りの状態も発生。行政や支援団体間の連携に問題を感じました。

「災害医療の日赤を再認識」

地元紙「熊本日日新聞」の記者として熊本地震の現場を取材

林田賢一郎さん

海外救援金による支援活動の継続、義援金は被災地へ送金

海外の赤十字社などを通じて世界の人々から寄せられた救援金を財源とし、日赤は避難所などでの生活を強いられている被災者に対し、西原村を拠点に健康支援活動を展開。この活動は、地元保健師と協力しながら、高齢者や子どもを持つ母親などの要配慮者から健康状態を聞き取り、それらを通じた傾聴（こころのケア）、生活不活発病や熱中症に対する対策指導、避難所の衛生管理などを行うものです。また、これからの暑くなる季節に向けて、冷却シートなどの熱中症予防グッズ、虫よけ、ミスト機能付き大型送風機などの物資を届ける予定です。

平成28年熊本地震災害義援金

受付状況	124億4,614万1,791円（320,194件）（平成28年５月20日現在 集計分）
送金状況	75億9,925万6,070円（平成28年５月25日現在）
受付期間	平成28年6月30日（木）まで
受付口座	郵便振替（ゆうちょ銀行・郵便局）

口座記号番号　00130-4-265072
口座加入者名　日赤平成28年熊本地震災害義援金

※銀行振り込み、熊本県支部、大分県支部、信用金庫などでも受け付けています。詳しくは日赤のホームページ（http://www.jrc.or.jp/contribute/help/28/）をご覧ください

全国から、そして世界からの心温まる支援に感謝申し上げます

４月14日に発生した熊本地震災害で、亡くなられた方々に対し心よりお悔やみ申し上げます。また被災された多くの皆さまが一日も早く普段の生活に戻られますようお祈り申し上げます。

この災害におきましては、日赤も医療救護班の派遣や避難所に救援物資をお届けするなど全力で対応を行ってまいりました。現在も、長期に避難された方々に対して、ストレスの軽減などのケア活動を行っています。

このたびの災害では、災害救護活動をはじめとした日赤の活動を支える「活動資金」や「海外救援金」、被災された方々にお届けするための「義援金」など、多くの皆さまからご支援、ご協力をいただいているところです。ご寄付いただきました「活動資金」により、今回も迅速な救護活動を展開することができました。「海外救援金」により今後も支援を継続してまいります。またお寄せいただきました「義援金」は、ただちに熊本県、大分県に送金され、被災市町村を通じて全額が被災された方々に届けられています。

日本赤十字社社長
近衞 忠煇

ご支援、ご協力をいただきました皆さまに心より感謝申し上げます。

熊本県は、日赤発祥の地です。日赤の前身である博愛社設立の許可が下された歴史的な場所であるジェーンズ邸は全壊しましたが、日赤は、自らの発祥の原点に戻ってあらためてこの熊本地震災害の救護活動に臨んでいるところです。

今後は仮設住宅への移行や、新たな復興支援の取り組みも始まっていくと思います。私たちは、これからも被災された方々に寄り添った活動を継続してまいります。

引き続きご協力をいただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

SPECIAL2

世界の人道支援に日赤の姿

いのちと健康、人間の尊厳を守る最前線に

世界中で起きている武力紛争や自然災害、感染症の拡大や干ばつなどによる食糧危機――。日々多くの人のいのちと健康が脅かされている中、人道支援団体である赤十字には大きな期待が寄せられています。医療や保健分野で多くの人材を抱える日本赤十字社も、その役割を果たすことが求められており、現在日赤は世界10カ国の国際救援や開発協力活動、国際赤十字の事務局に25人を派遣。紛争被害者の支援、災害被災者を対象にした復興支援、医療保健支援事業などに取り組んでいます。

56年間で1689人を派遣

日赤が戦後、国際救援に派遣した要員は1689人（平成28年4月現在）。その最初の派遣となったのは昭和35（1960）年のコンゴ共和国でした。同年ベルギーから独立した同共和国は、ベルギー人医師の引き揚げに伴い医療体制が崩壊。国際赤十字から各国赤十字社に医療班派遣が要請されたのです。日赤は同年8月に4人からなる医療班（医師2人を含む）を派遣し、動乱時期の3カ月にわたり医療活動を行いました。

翌年の昭和36（1961）年には東南アジア巡回診療がスタート。開発途上国援助のため、医師、看護師らで組織された診療班が医療サービスに恵まれない東南アジアの国々を巡回。この取り組みは昭和40（1965）年まで継続されました。昭和49（1974）年には、初の災害派遣として、サイクロンに襲われたバングラデシュで救援活動を展開しています。

バングラデシュで活動中の近衛派遣員（現社長）

活動は「安全」を第一に

国際救援および開発協力の要員として登録されている日赤職員は399人（平成28年5月現在）。その6割が医師、看護師、薬剤師などの医療職で、4割が事務系総合職です。登録には、日赤が国際赤十字と共同で実施する研修や、危機管理研修などの受講が必須で、専門分野ごとのスキルアップ研修も行われます。

派遣に際し最も重視されるのは「安全」です。交通事故・一般犯罪はもちろん、暴動や武力攻撃などに巻き込まれず、身を守ることが全てに優先されます。各支援先で日赤派遣要員の「プロ意識と技術」「チームワーク」などは高い評価を受けており、国際赤十字からは「多様な分野での人材を」と派遣要員の拡大も要請されています。

石橋派遣員 © Juozas Cernius / IFRC

世界で活動中の日赤派遣要員（5月19日現在）

紛争被害者支援――赤十字の原点

敵味方の区別ない救護活動は「赤十字の原点」。他の支援団体が入れない紛争地で、中立組織の赤十字だけが活動を許されているケースは少なくありません。赤十字国際委員会（ICRC）が現在、南スーダンとミャンマーで展開している医療支援の活動地も反政府側勢力の支配地域です。日赤はこれら両方の地域に看護師を派遣し、紛争被害者支援の活動を行っています。

シリア紛争で400万人の難民が海外に逃れるなど、難民支援は近年大きな課題になっています。日赤はレバノン、ヨルダン、パレスチナ、ギリシアに医師・看護師らを派遣し、難民支援を実施中です。

緊急救援＆復興――災害派遣

地震や台風などの自然災害で日赤は、被災地赤十字社の支援要請に基づき、医療救護などの緊急救援を実施。ハイチ地震やネパール地震など、生活インフラが破壊されるケースでは、生活再建に向けた復興支援にも取り組んでいます。

赤十字の復興支援の特色は「ビルド・バック・ベター」（災害前よりも良い状態に）。被災国が従前から抱えている災害への脆弱性や保健衛生の課題などの問題解決に力を入れています。被災者ニーズに基づき、彼ら自身の手を借りながら進める復興支援スタイルは、事業の持続性の点で高い評価を受けています。

いのちと健康を守る開発協力

医療過疎地でいのちと健康を守るためには、地域の保健衛生や医療環境の改善が不可欠です。また防災・減災には、災害発生前から地域・住民の防災力を高めることが求められています。日赤は人材派遣や資金援助を通じて、これらの環境改善・能力強化をサポート。現在、フィリピンとケニアに要員を派遣しているほか、ベトナム、アフリカ南部4カ国などで資金提供を通じた開発協力を行っています。

日赤は開発協力にあたり、人材育成や教育を重視。支援が地域に根付き、住民の力により継続されることを目指しています。

国際赤十字を支える

世界最大の人道支援ネットワークである赤十字の一員として、日赤は国際赤十字に要員を派遣し、活動を支えています。国際赤十字・赤新月社連盟（連盟）の会長に2009年から日赤の近衛忠煇社長が就任。加盟190社のリーダーとして各社の組織・能力強化などに取り組んできました。

ジュネーブの連盟本部にも日赤職員が出向し、管理業務などを担当。連盟のアフリカ、アジア大洋州の各地域事務所に派遣されている職員は、各社の組織・運営能力の強化やボランティアの拡充・活性化、広報活動などをサポートする業務に携わっています。

次号の赤十字NEWS7月号から、派遣要員によるコラムが始まります。派遣要員へのご質問などありましたら、ぜひkoho@jrc.or.jpまでお送りください！

赤十字運動月間（5月1～31日）
見て、聴いて、触って 赤十字体験&PR

高知県支部は４月29日、「赤十字運動月間啓発パレード」を初めて開催。地区分区や施設の関係者、青少年赤十字メンバーなど302人が赤十字啓発用の桃太郎旗（のぼり旗）などを掲げ、高知市街の目抜き通り帯屋町筋をパレードしました。

青森県支部は５月８日、保管する「手製の赤十字旗」をライトアップ展示しました。「手製の赤十字旗」は、同県出身の三上剛太郎医師が日露戦争の最中、ロシア兵の攻撃から負傷兵のいのちを守るため、三角巾と切り裂いた赤い毛布を縫い合わせて作成。「世界の宝」として県支部が保管しています。「世界赤十字デー」のこの日は、より多くの人たちに人道の大切さを知ってもらおうと、正面玄関前に特設展示場を設けました。

鹿児島県支部は鹿児島市交通局との連携の下、「赤十字電車」を５～６月の２カ月間にわたり運行中です。同電車には赤十字の歴史や活動などを紹介したポスターを車内掲示。５月２日の出発式では青少年赤十字の保育園児たちが元気に「出発！」の合図。

京都駅前地下街で５月８日に行われた赤十字イベントで青少年赤十字賛助奉仕団の北村優さんは、子ども向けの防災ソング「まもるいのち ひろめるぼうさい」を発表。青少年赤十字の高校生がコーラスで盛り上げました。

金沢駅の地下広場で４月23、24日に行われた「HAB春はどきどき５chまつり」の赤十字ブースでは、２日間で約370人が救急法体験や外科手術体験などに参加。ハートラちゃんや、けんけつちゃんもステージで赤十字をPRしました。

北海道支部は５月９日から３日間、北海道庁で赤十字のパネル展を開催。熊本地震での活動を紹介したほか、最近避難所で注目されている段ボールベッドも展示しました。触ったり座ったりと、使い心地を確認する来場者の姿も。

初開催

赤十字ライトアップ運動
人道への思いも照らした赤十字色

世界赤十字デー（５月８日）を中心に、全国の歴史的建造物やランドマークを赤十字色に彩る「赤十字ライトアップ運動」がことし初めて実施されました。視覚的アピールを通じて赤十字への理解と協力を深め、人道について考えるきっかけを作ることが目的です。日赤の関連施設のほか、民間のビルやタワーなど全国の施設が協力しました。熊本地震の被災者への応援の思いも込めて、それぞれの街に赤十字色を輝かせました。

虎ノ門ヒルズ（東京都）

名古屋テレビ塔（愛知県）

善光寺（長野県）

人と防災未来センター（兵庫県）

彦根城（滋賀県）

諏訪赤十字病院（長野県）

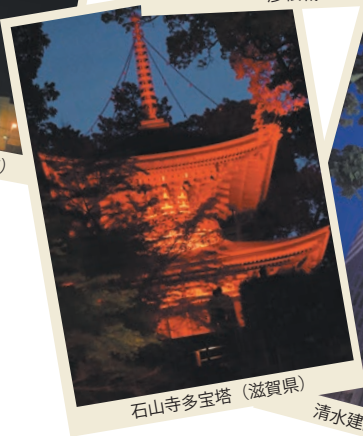
五稜郭タワー（北海道）

松江城（島根県）

海峡ゆめタワー（山口県）

旧長浜駅舎（滋賀県）

松本城（長野県）


石山寺多宝塔（滋賀県）

清水建設本社（東京都）

知ってて良かった！

日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

㉔ 白内障は老化現象の一つ 早めの手術が安心です

釧路赤十字病院　副院長　五十嵐弘昌（ひろまさ）さん（眼科）

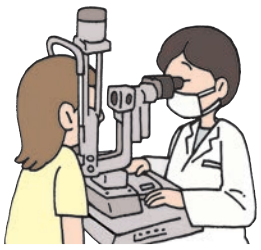
目の中でレンズの役割を果たす水晶体が混濁してくる状態が白内障です。かすみやぼやけが起きたり、光をまぶしく感じたりします。病気というよりも、加齢による老化現象と考えるのが分かりやすいと思います。皮膚のしわやたるみ、頭髪の後退などと同じように、年齢を重ねれば誰の身にも確実に起こりうるからです。

実は、人間の老化は25歳くらいから始まっています。目の老化もこの時期から始まり、水晶体の混濁が進行していきます。病気と異なり、急激に悪化することはなく、進行は少しずつ。物が見えにくくなる自覚症状は70歳前後からです。もちろん進行の度合いには個人差があります。その差には、長年の生活環境因子が複雑に絡むと考えられています。

こう書くと、「白内障進行を遅らせる食べ物や栄養素は?」と質問される方もいるのですが、残念ながらそうした予防法は確認されていません。一つ言えるとすれば、老化促進につながる生活習慣を改めることです。暴飲暴食や酒・タバコを控え、適度な運動を心掛ける。規則正しい生活による若さと健康の維持が、白内障の進行を遅らせることにもつながるのです。

治療は、混濁した水晶体を取り除き、レンズを目の中に入れる手術になります。“痛そう…”と怖がる方もいらっしゃいますが、点眼麻酔をしますので大丈夫。ごく短時間で終わる安全な手術です。また、白内障手術は一回受ければ再発しません。安心して受けてください。

手術を受ける時期は、自覚症状が出てからというのが一般的です。ただし、認知症を患っている場合、本当は見えていないのに「まだ良く見える」と言う方もいて、手術が遅れがちになります。また、認知症が進んだ方への手術は、眼球を動かさないといった協力を得ることが難しいケースもあります。そこで、白内障の程度や自覚症状にかかわらず、一定の年齢に達したら、早めに診察し手術を受けるのも一つの考え方だと思っています。



診察後に手術する医療機関を選ぶ際は、年間の手術件数なども参考に。よりたくさんの経験を積み、技術・経験が豊富な医師を選ぶと安心です

釧路赤十字病院
〒085-0032
北海道釧路市新栄町 21−14
TEL 0154-22-7171（代表）

Voice&プレゼント

Voice

赤十字 NEWS にお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

●災害大国として、赤十字の人道主義が広く周知されて、たくさんの人に実践されることを祈っています。

――髙藤史憲さん（三重県）

プレゼント

「けんけつちゃんの折りたたみ傘（紺・橙・水色）」各色１名（計３名）にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。

※色はお選びいただけません

①お名前（匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください）
②郵便番号・ご住所　③電話番号　④年齢
⑤赤十字 NEWS6月号を手にされた場所（例／献血ルーム）
⑥6月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか？（いくつでも）
Ⓐ今月の出会い　Ⓑ特集1　熊本地震災害から1カ月
Ⓒ特集2　世界の人道支援に日赤の姿　Ⓓ赤十字運動月間イベント報告
Ⓔライトアップ運動報告　Ⓕエリアニュース　Ⓖ常任理事会開催報告
Ⓗ健康豆知識　白内障　ⓘVoice & プレゼント
Ⓙネパール地震　被災地に戻ってきた笑顔　Ⓚ先人たちの語る赤十字
⑦赤十字 NEWS のご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice（読者の声）への投稿もお待ちしています。

応募先● 郵　送／〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3
日本赤十字社 広報室 赤十字NEWS6月号プレゼント係
FAX／03-6679-0785
メール／koho@jrc.or.jp（件名「赤十字NEWS6月号プレゼント係」）

応募締切● 6月27日（月）必着
※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

AREA NEWS

高松赤十字病院に女性外来を開設

香川県

ゆくゆくは肛門外科や心の悩みのケアなど、診療範囲を拡大する計画も

「男性医師には相談しづらい」「待合室の男性の目が恥ずかしい」などの声に応えて、高松赤十字病院は４月から女性医師らによる女性専用の外来を開設しています。

同外来では、乳腺外科、泌尿器科、産婦人科の女性医師が、乳房に関する悩みや尿漏れなどの症状、また思春期や更年期特有の症状などを中心に対応。待合室も男性と一緒にならないよう配慮されています。

生活改善実行グループと防災でタイアップ

山口県

参加者からは「地域内で常日頃、顔の見える関係づくりが重要」などの指摘がありました

山口県支部は、農村・漁村などにおいて生活改善に取り組む住民グループと連携。「防災・減災への取り組みを通じて地域の安心・安全を確保する仕組みづくり」に昨年度から取り組んでいます。

これまでに、①防災・減災の基礎知識、②災害時に必要となるAEDの使い方・けがの応急手当などを学習。４月25日の会議では、「災害時住民支えあいマップ」の作成を進めることなどを確認しました。

学生ボランティアが博多どんたくに参加！

福岡県

どんたくの定番グッズ「しゃもじ」を両手に「けんけつ体操」を踊りました

５月４日に福岡市で開催された「博多どんたく港まつり」のパレードに、赤十字の学生ボランティアが参加。沿道の市民や観光客らに献血への日頃の感謝を伝えました。

参加した学生は、福岡学生献血推進協議会と北九州学生献血推進連盟のメンバー81人。両団体は、若年層に献血協力者を広げるための活動を展開しており、パレード参加もその一環として取り組まれました。

サーキットに赤十字ブース 救急法などをPR！

三重県

ことし初めて設けられた輪投げコーナーは子どもたちに大人気！

三重県支部は４月23、24日に鈴鹿サーキットで開催された「Enjoy Honda 2016」（本田技研工業㈱主催）に参加しました。ブースを出展し、赤十字の活動を紹介するパネルを展示したほか、AED（自動体外式除細動器）や心肺蘇生法の体験コーナーを設置。子ども用救護服が着用できる撮影会も行われました。熊本地震災害義援金への呼び掛けには、２日間で約42万円の協力がありました。

常任理事会開催報告

平成28年5月20日、本社において平成28年度第2回の常任理事会が開催されました。

今回の常任理事会は、付議事項はありませんでしたが、平成28年熊本地震災害に対する日本赤十字社の対応について、報告しました。

第88回代議員会開催公告

平成28年6月24日（金）、午後1時から新霞が関ビル「全社協・灘尾ホール」（東京都千代田区霞が関3丁目3番2号）において第88回代議員会を開催し、左記の事項を付議いたします。

平成28年6月1日

記

第1号議案　役員の選出について
第2号議案　平成27年度事業報告及び収支決算の承認について

WORLD NEWS

～ネパール地震から1年～
困難乗り越えながらの復興支援
被災地に戻ってきた笑顔

昨年４月25日に発生したネパール地震は、死者8857人、全半壊家屋88万戸という甚大な被害をもたらしました（2016年４月現在、国際赤十字・赤新月社連盟〈連盟〉発表）。緊急救援として保健医療支援などに取り組んだ日本赤十字社は、ネパール赤十字社〈ネパール赤〉や連盟と連携し、その後も被災者の生活再建、地域の復興支援などを続けています。

ネパール地震に際し、日赤に寄せられた海外救援金は20億円余り。この救援金をもとに日赤は、最も被害が大きかったシンドパルチョーク郡の山間部を中心に、地域の仮設診療所の再建などに取り組んでいます。

昨年９月にはネパール新憲法の公布による混乱からインドとの国境が封鎖され、燃料危機が発生。また、混乱の影響でネパール政府が復興に集中して取り組めなかったことから、復興計画全体に遅れが生じ、日赤の復興支援も少なからず影響を受けました。しかし、発災１年を前にした今年４月17日には、再建を進めていた地域の仮設診療所が完成。成果が見え始めています。

ラガルチェ村に完成した地域の仮設診療所

喜びに包まれたラガルチェ村

地域の仮設診療所の再建は、日赤が14村の仮設診療所の再建支援を担当。今回完成した地域の仮設診療所は、日赤が震災直後から医療支援を行ったメラムチ村から車で１時間半ほど離れたラガルチェ村に開設されました。

仮設診療所の引き渡し式には、地域の人びとをはじめ、ネパール赤や連盟、日赤職員を含めて100人近くが参加。山間部には病院がないため、診療所が村の人びとの健康を支えるよりどころです。そのため、「地震後は診療所が壊れてとても困っていました。新しい診療所ができて、本当に助かりました」と参加者は語り、村は喜びに包まれました。

現地派遣されている日赤代表部の新野智子首席代表は「ここまで支援が進んできたのは、日赤とネパール赤の良好な関係と合わせて、地域の住民ときめ細かい意見の交換を積み重ねてきたからだと思います」と地域との連携の大切さを強調しています。

今後は教育支援、住宅再建も

地域の仮設診療所の再建支援とあわせ日赤は、山間部の被害状況調査を継続。被災者の支援ニーズを探ってきました。これまでに住宅再建支援や生計支援など支援ニーズが明らかになっています。

今後、ネパール赤と連携しながら、これらの支援の具体化を図っていく予定です。

引き渡し式に先立つ歓迎のパレード

診療所の引き渡し式の様子

セカンドネームは「ナオキ」

震災の時に生まれ、１歳になったナオキ君

地震発生後の混乱の中、崩壊したバンスカルカ村の診療所に産気づいた妊婦が来ました。被害状況を調査していた日赤アセスメントチームにより、山間部の悪路を耐え、メラムチ村の病院に搬送された女性は無事出産。生まれてきた子どもに、彼女を助けた日赤職員の名前「ナオキ」をつけました。

地震発生以降支援活動を続けている日赤に対する地域の信頼は厚く、子どもに日本人の名前をつけるのがちょっとしたブームに。ラガルチェ村に完成した地域の仮設診療所でも「最初にここで生まれる子どもに日本人の名前をつけたい」という声が上がっています。

先人たちの語る赤十字
（赤十字理念普及ミニシリーズ）

アンリー・デュナンが提唱してはじまった赤十字運動。人道的価値を希求するその理念が人種や宗教などの違いを越えて世界中の人びとの心を動かし、広まりました。
歴史に名を残した人たちも例外ではなく、その言葉は私たちに勇気を与えてくれます。
「先人たちの語る赤十字」、今回は橋本祐子さんです。

“奉仕は、人生の家賃”

人は人に支えられて生きている。
関わったすべての人に恩返すことはできない分、
自分が住んでいる社会に還元するのだ。
これがボランティアの本質である。

橋本祐子（さちこ）
（元本社青少年課長。1964年の東京パラリンピックで赤十字語学奉仕団を創設。青少年教育に果たした功績により、1972年に日本人として、アジアで、また女性として初めて「アンリー・デュナン記章」※を授与された）
※アンリー・デュナン記章とは、国際赤十字最高の栄誉とされるメダル
（出典：歴史が眠る多磨霊園HPより）